

経過の異なる双胎児とその家族に対する看護介入

Nursing care to a family of twin, complicated by different course of disease

西4階病棟：柳澤実千代・小池 景子・下村 陽子

〈要 旨〉

不等双胎として早産で出生し、異なる経過をたどった事例を経験した。母親は当初、ふたりの児に対する偏愛と育児への強い不安を抱いていた。しかし個室での面会やカンガールケア、母子同室などを通して病児へも安定した関わりがもてるようになったことが、ふたりの経過の違いを受け入れて母子関係を確立していく大きな一因となった。

それぞれの児の退院時期は十分な配慮が必要であり、育児の協力者となり得る家族への早期からの関わりが重要であった。

〈キーワード〉

双胎 母子関係 偏愛

I はじめに

多胎児の妊娠・出産・育児は単胎児と比べ母親の不安や負担が大きく、また偏愛行動を起こす可能性があるといわれている。しかし医療者として、母親の心理状態を十分に把握・理解した上で母児への関わりをもつことは難しいことが多い。

今回、不等双胎として早産で出生し、異なる経過をたどった事例を経験した。その中で母親がふたりに対する偏愛と育児への不安を抱いていることを知り、母子関係確立へ向けて、大学病院としての限られた時間と場所の中で展開した看護介入を振り返り、今後の示唆とする為に検討した。

II 方法

ふたりの児の経過と母の言動・心理状態の変化から1・2・3期と段階を分け、看護介入について記録から振り返り検討した。

III 事例紹介

平成13. 5. 8出生 在胎34週4日

I児： 女児 出生時体重1858g Apgar score 8/9

診断名 早産児 低出生体重児 一過性多呼吸

II児： 女児 出生時体重1170g Apgar score 7/9

診断名 早産児 極低出生体重児 一過性多呼吸

動脈管開存症 大動脈弁狭窄

母親： 28歳 0回妊0回産

二絨毛膜二羊膜双胎、不等双胎（II児 IU GR）と診断され、妊娠29週

0日より入院、妊娠管理。

家族歴；特記事項なし

既往歴；特記事項なし

父親； 27歳 健康

他県在住。仕事の都合で面会は月に1回程度。

IV 経過

1) 母親の経過

二絨毛膜二羊膜双胎，不等双胎（Ⅱ児 IUGR）と診断され，妊娠29週0日より入院，妊娠管理となる。

Ⅱ児の発育不良のため，34週4日帝王切開術施行される。

術後14日目退院。他県からの帰省分娩であり，退院後も実家より毎日面会に通う。父親が面会に来るのは月に1回程度であった。

両親は，ふたりを一緒に連れて帰りたいという希望がある。

実家の祖父母の協力はあがるが，夫とは妊娠中からの別居であり，児の長期入院により母親の精神的負担が予想された。

2) 児の経過

I児：クベース内酸素管理にて，呼吸状態改善。22日目にクベース管理中止となる。栄養摂取，体重増加ともに良好。

修正40週に入り退院の許可が出るが，両親の希望でⅡ児の経過を待って退院を見合わせていた。

Ⅱ児：酸素投与は施行せず，呼吸状態維持。

日齢10 動脈管開存に対し，インダシン投与施行。

日齢17 心タンポナーデにて呼吸停止，14日間の呼吸器管理となる。

股関節の過度の屈曲，足関節の背屈・硬縮，筋緊張の亢進，嚥下障害を認める。

脳波，頭部エコー，MRIでは明らかな異常は認めない。

V 看護の実際

母親の心理状態の変化から1・2・3期と段階を分け，記録より看護介入を振り返った。

第1期 I児：急性期を過ぎ，安定した発育がみられる

Ⅱ児：病状が不安定で集中治療を行っている

母：主にⅡ児の経過に対する不安が強い

第2期 I児：退院可能な状態

Ⅱ児：回復期だが入院治療が必要

母：I児の退院により，ふたりに対する愛情に偏りが生じることへの不安が強い

第3期 I児：病院での発育順調

Ⅱ児：体重は増加し，神経症状も改善傾向あり

母：ふたりの違いを受け入れて，それぞれに積極的に関わられるようになった

以上の時期に応じて母の意向を尊重しつつ、母子関係確立へ向けて看護を展開した。

第1期：母親は主にⅡ児の経過に対する不安が強い

看護目標・Ⅰ児に対して母子関係が確立できる

- ・Ⅱ児に対する不安を表出し、可能なケアに参加できる

計 画・Ⅰ児への育児行動をすすめる

- ・Ⅱ児へのオムツ交換、清拭など可能な範囲のケア参加を促す

母の反応

- ・Ⅰ児へのケア（沐浴、直接哺乳など）は意欲的に行う。言葉がけも自然に行える。
- ・Ⅱ児は重症感があり、手を出しにくい。「怖いですね」「ごめんね」と言葉がけが多い。
- ・タッチングや、清拭などのケアを促していくことで、「顔色や目つきも良くなってきた」「写真撮っていいですか」などと日々の変化を少しずつ前向きにとらえていく言葉が聞かれるようになる。
- ・「少し無理をしても3人で過ごす時間がほしい」「ふたりへ平等に関わりたい」との訴えあり。

第2期：母親は、Ⅰ児の退院を迎えた時、ふたりへの愛情に偏りが生じることに強い不安を抱く

看護目標・面会が充実し母の不安が軽減する

- ・Ⅱ児のケアに積極的に参加できる

計 画・面会は個室において3人で過ごせるように配慮する

- ・Ⅱ児へのカンガルーケアを導入
- ・Ⅱ児の沐浴などケアの範囲を広げる

母の反応

- ・著しいⅠ児の成長に対し、母性感が強くなってくる。
- ・カンガルーケアによりⅡ児の状態をとらえ、抱っこが自然にでき自主的にケアに取り組む姿勢がみられた。
- ・「目に見える変化が嬉しい」「出来る限り良い刺激になることをしてあげたい」と積極的に関わられるようになる。
- ・ふたりの経過の違いを受け入れ始め、それぞれの児に向き合った関わりができるようになる。
- ・父親の来院時は、家族4人が個室で過ごせるようにした。

第3期：母親はふたりの違いを受容し、個々に積極的に関わられるようになる

看護目標・退院へ向けての準備ができる

- ・家族が育児に参加できる

計 画・母児同室

- ・Ⅱ児への口腔内吸引、注入栄養、リハビリなど手技的ケアも取り入れる

母の反応

- ・「一緒に暮らしたい、実家へ連れて帰る準備を考え始めている」I児と終日過ごすことで、育児の大変さと喜びを実感する。
- ・II児へのケアも自ら積極的に行う。「注入や吸引をしながらでもやっていけそう。でもふたりを一緒にみるのは……。もう少し具合が良くなるまでは面会に通いながらやってみたい」
- ・祖父母の来院時はできる限り、児の情報を提供した。母児同室中に祖父母もケアに参加していた。
- ・修正4ヶ月、I児は退院となる。その後も、祖父母の協力を得て定期的にII児のもとへ面会に通院する。

VI 考察

今回、不等双胎でI児は順調に成長を遂げるが、II児の長期入院が必要となった事例を経験した。両親、特に母の親としての葛藤を知り、看護介入の方法を考えてきた。さらにこの事例では、父親の面会・育児協力が得難いことも、母親の育児不安を強める要因だったと考える。

この経過の中で、母性を築くためにも、母親の意向を尊重したケアを考えてきた。当初、母は頑なに「ふたりに平等に接したい」と思い、II児への関わりがあまりできないことに自責の念を抱いていた。

一般的に双胎の母親の心理として、ふたりの退院時期が異なる場合、母親の児への愛着はひとりに向けて強く作用し、特に病院に残された児に対するマイナス志向が生まれる事がある。またひとりだけ長期の母子分離状態にあると、母性愛のバランスに悩んだり、ひとりひとりに十分な事をしてあげられないという負い目を感じている母親が多いという。

今回の事例ではI児が先に退院できる状態にあったが、母親が偏愛行動への不安を抱えていることを知り、母児が安定した関係を築けるような計画を取り入れた。

そして、今回のケアを通じて徐々に母親の心理状態に前向きな変化がみられるようになった。当初は恐る恐るケアに参加していたII児に対しても次第に愛着が生まれ、自主的に育児行動に携わるようになった。また、I児の成長を認識し、母親という立場を感じ始めた。

さらに母児同室を取り入れ、育児の大変さと喜びを体験したことで、“双胎を平等に育てるというのは必ずしもふたりに同じことをするというのではない”と感じとれていった。この経過から考えると、もしI児が早い時期に退院していたら、I児の成長発達も含め、育児の現実や母性愛を早期に感じる事ができたかもしれない。また、今回は母親から家族の介入について訴えてくることはほとんどなかったが、父親や祖父母ら協力者となる家族を含めた「ファミリーケア」を早くに取り入れることで、母親の心理的負担は軽減していたことも考えられる。

NICUのように、感染対策や治療のために面会制限のある環境で、そのファミリーケアを考えた時、双胎を育てていく上での、適切な情報提供や選択肢を提示しながら看護介入できていたのか振り返ると不安は残る。

現在も経過中の事例であるが、これからII児の退院という次の目標に向けての看護介入が課題となっている。

Ⅶ まとめ

- (1) 双胎でふたりの経過が異なる1例を経験した。
- (2) 母は愛情の偏りが生じることに不安を持ったが、入院中の関わりによって軽減した。
- (3) 母が病児に安定した関わりを持てるようになることが、母子関係確立の一因であった。
- (4) 他県からの帰省分娩であり、父親不在が母の不安を強めていた。祖父母を含めた早期からの関わりが必要だったかもしれない。
- (5) ふたりの経過が異なる双胎の場合、それぞれの児の退院時期には十分な配慮が必要であり、長期入院による本人・家族全体に対する問題点と利点を考慮すべきである。

Ⅷ おわりに

当病棟では、今回のような事例や合併症を持つ出産例も多く、産科での妊娠・分娩から退院、また小児科での育児期間まで考えた長期的な看護介入を要する場合がある。

施設としての制約がある中、それぞれの個別性を考えて看護の方向づけをし、展開していくことが重要であり、今回の事例での経験をひとつの方法として今後に生かしたいと考える。

参考文献

- 1) 大岸弘子：双子とその母親のケア，ビネバル出版，1993
- 2) 菊地信子ほか：多胎児の新生児期の看護，Neonatal Care, Vol.11 No.9, 18-22, 1998
- 3) 久保田奈々子：多胎児の家族の思い，Neonatal Care, Vol.11 No.9, 29-34, 1998
- 4) 久保田奈々子：双子の母親になるということ，助産婦雑誌，Vol.52 No.2, 9-16, 1998
- 5) 服部律子：3年めを迎えた双子の親の会「ツインスターズ」のサポート，助産婦雑誌，Vol.52 No.2, 17-21, 1998
- 6) 山崎友恵ほか：専門家の皆さん，もっと理解を，助産婦雑誌，Vol.52 No.2, 28-33, 1998
- 7) 横山美江ほか：多胎児に対する母親の愛着感情の偏りと関連要因の分析，日本公衛誌，第48巻，85-94, 2001